〔社会科教室〕

―社会意識の形成―

―いろはカルタと教育勅語―

富来　隆

一　カエルの子とズズメの子

〝いろはカルタ〟式発想法は、たしかに封建社会の庶民意識を端的に現わしており、現実えの残存もまだ強い。

かつて封建制の社会にあつて、人が生れながらに身分、階級が固定されていた当時、たしかに武士は武士として、また百姓、町人は百姓、町人として、それ〴〵の生活様式が定められ、社会意識も固定されていた。そこでは身分や職業のちがいがそのまゝ同時に階級のちがいでもあり、住む世界の違いであつた。世界のちがう人々が一緒の生活をすることは不可能であつた。だから「縁なき衆生は度し難し」であり「つり合わぬは不縁のもと」なのであつた。「カニは甲羅に似せて穴をほる」ものであり、カエルの子は所詮カエルの子以外にはなり得なかつたのだ。つり合うことは初めから出来ない相談なのだ。

しかし資本主義の時代になり、民主、自由の新思想が入つても、遺伝化したごとくに肉体化した発想法は、ほんの少し形をかえたゞけでやはり私たちにくつゝいてまわつている。

なるほど身分や職業は個人本位でどん〴〵変えられるようになつた。私たちは食わねば生きてゆかれない。だから何らかの職をもとめて仂かざるを得ない。貨幣がすべてに物を云うようになつた。「金の切れ目が縁の切れ目」になり、「つり合わぬ」とは貧富の差を意味するように思われはじめたが、カエルの子がカエルの子である以上、形が変つてもその思考様式は変つていないようである。

ことに、農業、漁業の生活にはほとんど変化が見られず、職業社会には相変らずの古めかしい身分意識がまつわりつきそれがその本人だけでなく、家族までの生活意識の全般を規制する。

政治家タイプ、実業家タイプ、教員タイプ、農民タイプなどゝ云われるように、職業はその人の思想だけでなくタイプをさえつくつてゆく。家族生活にも一定のパターンを形作つてゆく。人間を類型化さえしてしまうのである。職業のちがいは人々に重要な世界観の相違をもたらす。ちがつた人間世界を作りあげるのだ。これが子供に影響して「カエルの子はカエルの子」になるので「ナマズの孫ではないわいな」と歌われるのである。軍人の子、商人の子、農民の子、学者の子幼いながらに違うのである。こうして「三つ子の魂百まで」つゞき、「雀百まで踊りわすれず」にいるならば、職業の異なる家庭に育つた人たちは、同じ家庭生活をやりにくいと云

える。「つり合わぬ」とは貧富の差よりも職業による世界観＝人間性の相違から理解されるべき点が多くはないか。

しかしこの違いを打破して、より高く広い人間性をもつようにすることこそ教育の使命であり、マス・コムの力である個と全の間にあつてPTAの重要性が強調されるのも右によるのだ。

二　ドン・キホーテ

ところでカエルの子もスズメの子も民衆の姿である。自動車族には縁のない連中だと云うことも云える。貧富の差、使用者と傭われ人、それはやはり昔の領主と土民にも似た大きな違いがないとは云えない。しかし、「やせガエル負けるな一茶こゝにあり」とばかり気張つた応援団長がとび出したりついに柳にとびついて小野道風を奮起させるほどの実践力をもつてもいる。たとえ「井中の蛙大海を知らず」と笑われてもそこには健康な庶民の息吹きがある。カエルの子たちが同盟して一揆をおこした話は聞かないが、なまじつか王様をほしがつたばつかりに、終りにはその王様にみんな食べられてしまつたあわれなイソップの物語がある。しかし、それもこれも、近代以前の話である。

ある意味で歴史はくり返す。新しいよそおいをつけて前近代的な非合理の力がふたゝび頭をもち上げ始めた。「老いては子にしたがえ」と云うのにもとりあわず、民衆のねがいも「馬の耳に念仏」でしかあり得ない。軍隊制度の復活をはかり、教育制度をいびり廻す。たしかに、士官学校と師範学校―軍人勅諭と教育勅語―は敗戦までは皇国日本の二本の支柱であつた。だがその頃の古強者どもが、また我物顔してしやしやり出ては困つたことだ。あゝ汝、ドン・キホーテよ。町にも村にもあらゆる職場にも、甲冑に身を固めたドン・キホーテの勇ましさよ。そして私たちにも忠節を強要しはじめた。

近代教育の洗礼をうけたカエルの子―カンガエル族―たちは時にマンボ・スタイルに街を流しても、時にスクラムを組んで団結の力を意識する。ドンキホーテは戸惑う。そこで家来共をかり集める。「虎の威を借る狐」どもが集る。都会の谷間には夕方になるとバット族がとび廻りはじめる―かのスパい戦術にのつて遊泳術よろしく羽ばたく。それでもカンガエルの子たちが屈せずにヨコに手をつないで仲よくすると、遂に封建的なタテの道徳をふりかざして威圧する。「不逞の輩」が「党中に党」をつくつて「叛乱を企てる」と放言する。切崩しも行われる。お金が酒、女、役職ETCが相変らずの古臭い一つ覚えがくり返される。

私たちにはイソップ物語のようなあんな王様はもう要らない。「虎の威を借る狐」なんか真つ平御免だ。バットなんか煙草だけでもう沢山。ドンキホーテの武器も危くつて仕方がない。まつたく「狂人に刃物」だ。カンガエルの子たちが

本当にたのしい社会生活をおくれるようになるにはどうしたらよいだろう。

職業のちがいによる社会意識のちがいは、それでもお互いに話しあえば分るという面があるけれども、階層（階級をふくむ）のちがいによる意識のちがいは権力が媒介するだけに対立か支配服従か以外に和解の途がうすいように思える。同じ職場、同じ地域でのこの意識の対立を克服するには一体どうしたらよいものだろう。民衆は「井中蛙」から脱皮しなければならぬし、権力者はドンキ・ホーテ的甲冑をぬぎすてねばなるまい。

肉体を感情化するのではなくて、あくまで知性を肉体化する努力こそ必要なのではないだろうか。

―以　上―

會費を納入下さい

三十年度分会費未納者が多く、本誌発刊に多大の支障がありますので、未納の方は本号入手次第　大至急本会あて、会費三〇〇円也を御納入下さい。

常任委員一同

編輯後記

本号の原稿は昨年十一月に編輯を完了して印刷屋に渡してあつたが、種々の悪条件が重なつて、発行がこんなに後れたことは、執筆者はもとより、会員諸氏に対して誠に申訳ありません。次号は既に編輯も終了、すぐ印刷にかゝる段階となつており、鋭意後れをとりもどす積りです。会費未納の方は早急に納入頂き、会の運営を援助下さるよう切にお願いします

（富　来）

昭和三一年二月十五日　印刷
昭和三一年二月十五日　発行

年　会　費　三〇〇円
分売は本号に限り　頒価　一〇〇円

編輯兼発行人　大分県地方史研究会　代表者　渡辺澄夫
印刷人　高井久男
印刷所　大分市上野　電話一七七五　三恵印刷株式会社
発行所　大分市駄原　大分大学　学芸学部国史研究室内　大分県地方史研究会
（振替口座下関二五四九番）